

田村和彦教授記念号に寄せて

田村和彦関西学院大学教授は、2010年4月の関西学院大学国際学部開設とともに、本学経済学部から移籍して就任され、2021年3月末をもって定年退職を迎えられます。

田村教授は、1975年に上智大学文学部ドイツ文学科を卒業後、東京都立大学大学院人文科学研究科独語独文学専攻修士課程で学ばれ、1978年に同研究科独語独文学博士課程を中途退学し、同年に東京都立大学人文学部助手となっています。1980年から桃山学院大学経営学部助手として就任したのち1983年に助教授に昇進し、1989年には同大学文学部助教授となっています。その間にドイツ連邦共和国・トリア大学奨学生として在外研究に従事されました。

関西学院大学に、1990年経済学部助教授として着任され、1996年に教授に昇任されています。経済学部教員としてドイツ語や人文演習の担当を通じて学部教育に尽力されるほか、本学言語教育研究センター副長として、言語教育研究センター長として全学の言語教育の運営充実につとめられています。あらたに設立された言語コミュニケーション文化研究科でも2001年に修士課程指導教授、2003年に前期課程指導教授・後期課程指導教授となって今日まで研究者育成にあたられました。とりわけ同研究科では、2007年から3か年にわたり言語教育研究センター長と並行して研究科委員長としての重責を担われています。また、2019年度より大学評議会に全学選出評議員として選ばれ現在に至っています。

田村教授の研究領域はドイツ文学及びドイツ文化論で、なかでも19世紀末から20世紀の激動するドイツを生きたトーマス・マンの研究に取り組まれてきました。近年、公開された日記や新しい資料を手がかりに、従来の古典的作家像の見直しを問いかけるその研究は『魔法の山に登る－トーマス・マンと身体』（関西学院大学出版会、2002年）にまとめられています。主要な研究対象とされたマンが生きたヴァイマル時代のドイツの文化・芸術のみならず、身体・衛生・植民地といった幅広い問題圏にも関心をよせられています。ニコラウス・ゾンバルト『男性同盟と母権性神話－カール・シュミットとドイツの宿命－』の翻訳はそのような研究関心からの成果といえることができるでしょう。また、学会においては日本独文学会、阪神ドイツ文学会、日本ヘルダー学会で活動されました。日本独文学会において理事・常任理事となり、さらに学会誌『ドイツ文学』及び *Neue Beiträge zur Germanistik* の責任編集者を務められ、また阪神ドイツ文学会において『ドイツ文学論攷』の編集監事をされています。また、関西学院大学出版会の運営に参画され、2019年からは理事長を務められています。同出版会にはPR誌『理（ことわり）』がありますが、2008年から本年まで「ドイツ庭ものがたり」を25回にわたって連載されて多くの人を楽しませてきました（さらに小文をくわえて出版会より2021年3月に刊行予定）。国際学部設立にあたっては開設準備委員会委員となり、その構想において中心的な役割を担われました。また、学部運営に学部長室委員、副学部長（学生担当）、そして副学部長（教務担当）として献身的に当たられました。また、多数の学生を指導して社会に送り出されています。

このように田村和彦教授は学内外で教育・研究のいずれにおいても多大な貢献をされておられます。この度の御退職に際し、国際学部としての感謝の意を表して本記念号を発行することにいたしました。記念号の趣旨に賛同し寄稿して下さった執筆者の方々、また編集の労をとって下さった『国際学研究』編集委員の皆様へ篤く御礼申し上げます。

最後に、田村和彦教授の御健康と今後の研究のいっそうの御発展を祈念しつつ、刊行の辞とさせていただきます。

2021年3月吉日

国際学部長 平 林 孝 裕